

人はなぜ悲劇を愛するのか

— アウグスティヌス『告白』 *Conf.* 3.1.2~3.1.3 の悲劇論 —

水 落 健 治

序

人はなぜ悲劇を愛するのか — この問に対しては古来様々な解答が与えられてきたが、それらの中でもっともよく知られているのは、アリストテレスが『詩学』1449b 24-31で展開している、いわゆる〈カタルシス論〉であろう。この箇所ではアリストテレスは、およそ次のようなことを語っている。

1. トラゴディアー(悲劇)とは、すぐれた人たちの厳粛な行為のミーメーシス(まね、再現)であって、その行為は一定の大きさを持ち、完結したものでなければならない。
2. またそれはリズムや旋律・節をもった言葉を用いて再現を行うのであって、それもところによって韻律だけを用いることもあるし、また音楽をつかうこともあるというようなやり方である。
3. またそれは行為を行為することによって再現するのであって、ただ報告を通じて再現するものではない。
4. そしてその再現は、いたましさとおそれを通じて、そのようなパターマタ(受難、感情)のカタルシス(浄化)を達成して行くものなのである。

その一方、アウグスティヌス(以下、Aug.と略記)は、『告白』第三巻冒頭で、悲劇に没頭していた過去の自分を振り返りつつ、アリストテレスのそれとは全く異なった悲劇論を展開している。それはキリスト教の人間観に基づく「神学的悲劇論」ともいべきものであり、パスカルなどに大きな影響を与えた⁽¹⁾。

そこでわれわれは今回、『告白』の当該箇所(*Conf.* 3.1.2-3)のテキストを正確に分析することを通してAug.の悲劇論の語るところを探ってみようと思う。彼の議論を知ることによって、我々の悲劇に関する知見はさらなる広がりをもつことになると思われるからである。

以下、Aug.のラテン語テキストとその和訳を掲げ、それを註解してゆく形で論述を進めて行く。

以下の和訳は筆者の試訳である。解釈上問題のある箇所については、必要に応じて註をつけた。

I.

[3.2.2] *Rapiebant me spectacula theatrica plena imaginibus miseriarum mearum et fomitibus ignis mei.*

劇場の芝居がわたしを引きさらっていました。それは、私の惨めさの姿と情火の薪とに満ちていたのです。

紀元 370 年、16 歳の Aug. は素封家ロマニアヌスの援助を得て、修辞学の勉強のためにカルタゴにやってきた。北アフリカ第一の大都市は様々な刺激に満ちており、彼を翻弄する。彼はある女性との同棲生活をはじめ⁽²⁾、劇場で演じられる悲劇に熱中するようになる。彼はみずからの悲劇への熱中について、「私の惨めさの姿と情火の薪に満ちていた」と語るが、この語の内容が以下の記述で明らかにされて行くことになる。

II.

Quid est, quod ibi homo uult dolere cum spectat luctuosa et tragica, quae tamen pati ipse nollet? Et tamen pati uult ex eis dolorem spectator et dolor ipse est uoluptas eius. Quid est nisi mirabilis insania? Nam eo magis eis mouetur quisque, quo minus a talibus affectibus sanus est,

そこで人は、痛ましく悲劇的なことを観て悲しむことを欲するのですが、これらを見ずから蒙ることは欲しません。——これはどういうことでしょうか。にもかかわらず、観客はこれらのことから悲しむことを欲しており、痛ましきそれ自体が観客の欲求なのです。この事実、驚くべき不健全さでなくして何でしょうか。というのも、人はこれらの感情に毒されていけばいほど⁽³⁾、痛ましく悲劇的なことによって動かされるのだからです。

悲劇についての考察を開始するにあたり、Aug. はひとつの奇妙な事実に着目する。それは、悲劇をみる観客が「痛ましく悲劇的なことを観て悲しむことを欲する」にもかかわらず、「痛ましく悲劇的なことをみずから蒙ることを欲しない」

という事実である。

- (1) uelle dolere ex luctuosis et tragicis
- (2) nolle pati luctuosa et tragica

つまり観客は、一方で「痛ましく悲劇的なことに由来する悲しみを蒙ることを欲する」にもかかわらず、他方で「痛ましく悲劇的なことそれ自体を蒙ることを欲しない」のである。

- (1)' uelle pati dolorem ex luctuosis et tragicis
- (2)' nolle pati luctuosa et tragica

そして Aug. はこの事態を「驚くべき不健全さ」mirabilis insania と呼ぶ。

人が悲劇をみて心動かされる理由としては様々なものが考えられる。アリストテレスは『詩学』の中で、悲劇の構成要素として、「逆転」(ペリペティア)、「発見」(アナグノーシス)、「恐れとあわれみ」などを掲げている。しかるに Aug. は——マダウラのアプレイウスなどを介してアリストテレス『詩学』を知っていたかもしれないにもかかわらず——悲劇の本質をアリストテレスとは別の仕方で「悲しみ」*dolor*⁽⁴⁾ の内に見る。そしてその根拠として、「人は悲しみの感情 *affectus* に毒されていけばいほど、痛ましく悲劇的なことによって動かされる」という事実を掲げるのである。

したがって、悲劇の本質を理解するためには、この「驚くべき不健全さ」がなぜ起こるのかを解明しなければならない。

III.

quamquam, cum ipse patitur, miseria, cum

aliis compatitur, misericordia dici solet.

ただし、みずからが蒙る場合には「哀れさ」と呼ばれ、他人に同情する場合には「憐れみ」と呼ばれるのが常ですが……

まず Aug. は、この事態を分析するために二つの用語を定義する。

第一の語は「哀れさ」*miseria* であり、これは「痛ましく悲劇的なことがらのみずから蒙ることを意味する。また第二の語は「憐れみ」*miseri-cordia* であり、これは「痛ましく悲劇的なことがらを蒙っている他者に同情すること」を意味する。

かくして、悲劇をみる観客が「痛ましく悲劇的なことを観て悲しむことを欲する」にもかかわらず、「痛ましく悲劇的なことをみずから蒙ることを欲しない」という事態は、次のように定式化される。— 悲劇をみる観客は、憐れみを欲しているが哀れさを欲しない。

(1)" uelle misericordiam

(2)" nolle miseriam

IV.

Sed qualis tandem misericordia in rebus fictis et scenicis?

しかし、虚構された舞台上のことがらにおける「憐れみ」とは一体どのようなものなのでしょうか。

これらの用語を定義した上で、Aug. は、ひとが劇場で悲劇を観るときに、舞台上の出来事を見て感ずる「憐れみ」がどのような性質をもつものであるのか (=qualis) を解明して行く。

V.

Non enim ad subueniendum prouocatur auditor, sed tantum ad dolendum inuitatur et actori earum imaginum amplius fauet, cum amplius dolet. Et si calamitates illae hominum uel antiquae uel falsae sic agantur, ut qui spectat non doleat, abscedit inde fastidians et reprehendens; si autem doleat, manet intentus et gaudens lacrimat.

すなわち、観客は援助の手を差し伸べるために召喚されることはなく、ただ悲しむためにだけ招かれており、虚構の作者は「観客を」悲しませれば悲しませるほど気に入られます。そして、歴史上の人々であれ架空の人々であれ、登場人物たちに及ぶ危害が演じられても観客を悲しませない場合には、観客は嫌気がさして不平を言いつつ劇場から出て行きます。他方、悲しませる場合には、集中して留まり、悦びながら涙を流す⁽⁵⁾ のです。

「憐れみ」には二つの要素がある。そのひとつは「援助の手を差し伸べる」*subuenire* ことであり、もうひとつは「悲しむ」*dolere* ことである。つまり人は、他人の不幸を見るときに悲しみを感じ、この悲しみをいわば動因 *causa mouens* として不幸を蒙った人に援助の手を差し伸べようとするのである。

miseri-cordia = (1) *dolere*

(2) *subuenire*

そこで、劇場で悲劇が演じられるときに観客が感じる「憐れみ」がどのようなものであるかを考えてみると、この「憐れみ」には「悲しみ」という要素はあるものの、「援助の手を差し伸べる」

という要素が欠落していることが分かる。

misericordia = (1) dolere..... ○

(2) subuenire..... ×

したがって、本来の「憐れみ」がこの二つの要素を備えたものであるとするなら、悲劇が演じられる劇場で観客が求める「憐れみ」は、厳密には「憐れみ」とは言えないものであることになる。

したがって、この分析から次のことが分かる。— 劇場に悲劇を観にやって来る人々は、「憐れみ」の一つの要素である「悲しみ」を欲している。それが証拠に、悲劇作者が名声を獲得する度合いは、その脚本が観客を悲しませる度合いに比例する。

VI.

[3] Ergo amantur et dolores. Certe omnis homo gaudere uult. An cum miserum esse neminem libeat, libet tamen esse misericordem, quod quia non sine dolore est, hac una causa amantur dolores?

したがって、[劇場では] 悲しみさえ^⑥愛されているのです。しかし、およそ人は喜びを欲する存在です。[とすると、] あるいは、いかなる人も「哀れ」であることは望まないが「憐れみ」を望んでおり、このことは「悲しみ」なしにはありえないから、ただこの一つの原因によって「悲しみ」が愛されるのでしょうか。

以上の考察によって、悲劇が演じられる劇場においては「悲しみ」が愛されていることが明かになった。しかし考えてみると、このことは奇妙なことである。なぜなら、本来人間は「喜び」を愛する存在であり、喜びの反対概念である「悲しみ」は、むしろ厭われるはずのものだからである。そこで

Aug. は、この奇妙な事態が生起する根拠を次のように説明する。

1. すべての人間は自らが「哀れ」であることは望まない。
2. しかしすべての人間は「憐れみ」を望む。
3. しかるに、「憐れみ」は「悲しみ」なしには存在しえない。
4. この根拠から、劇場にやって来る人々は「悲しみ」を愛する。

Aug. は「すべての人間は憐れみを望む」と主張する。しかるに、劇場で愛される「憐れみ」は、そのふたつの要素の内のひとつである「援助の手を差し伸べること」subuenireを欠いているという点で不完全なものである。Aug. は、次節(3.1.3)で、このような憐れみの心を持っていたかつての自分を「擬似的に憐れみの心をもっていたもの」quasi misericorsと呼んでいるが、われわれはこの語を援用してここに述べられる憐れみを「擬似的な憐れみ」quasi misericordiaと名づけることができるであろう。

では、(1)なぜすべての人間は「憐れみ」を望むのか。また、(2)なぜ人間は劇場の中で「擬似的な憐れみ」を望むに至ったのか。

VII.

Et hoc de illa uena amicitiae est. Sed quo uadit? Quo fluit? Vt quid decurrit in torrentem picis bullientis, aestus immanes taetrarum libidinum, in quos ipsa mutatur et uertitur per nutum proprium de caelesti serenitate detorta atque deiecta?

このことも⁽⁷⁾、かの「友情の静脈流」⁽⁸⁾に由来

します。ですが、これはどこに進んで行くのでしょうか。どこに流れて行くのでしょうか。一体何のために、煮えたぎる瀝青の奔流へと流れ落ちて行くのでしょうか。醜い情欲の巨大な猛威となって流れ落ちて行くのでしょうか。友情の血の流れは、自ら同意しつつ天上の清澄さから歪み投げ出されて、それへと動き変化したのです。

すべての人間には共通の血が流れている。その限りで人間はお互い「友」amicusなのであり、他者の苦しみを見るとき「悲しみ」を感じ、「援助の手を差し伸べたい」と願う。つまり、すべての人間が「憐れみ」を望むのは、人間の中に流れている「友情の血の流れ」のゆえなのである。

だがこの「友情の血の流れ」は「煮えたぎる瀝青の奔流」に、「醜い情欲の巨大な猛威」へと変わってしまったのだ、と Aug. は語る。ここで念頭に置かれているのが「人間の墮落」というキリスト教の教えであることは明らかであろう。

したがって、ここで述べられていることは次のようになる。

1. すべての人間は、共通の血をもつ存在であり、他者の苦しみに対して憐れみをもつ存在として創造された。
2. だが人間のもつこの憐れみは、みずからの墮落のゆえに、歪んだ醜いものとなってしまった。
3. その結果、人間は、「援助の手を差し伸べる」という要素を欠いた「擬似的な憐れみ」quasi misericordia を望むに至った。

VIII.

Repudietur ergo misericordia? Nequaquam. Ergo amentur dolores aliquando. Sed caue immunditiam, anima mea, sub tutore deo meo, deo patrum nostrorum et laudabili et superexaltato in omnia saecula, caue immunditiam.

では、憐れみは退けられるべきなのでしょう。決してそんなことはありません。つまり、ある場合には悲しみも愛されなければならないのです。だが、わが魂よ、不浄を避けよ。我が神の庇護のもとに、われらの父祖たちの神であり、世々にわたり讃えられ称揚されるべきわが神の庇護のもとに、不浄を避けよ。

では、墮落した人間の有する「憐れみ」が「援助の手を差し伸べる」という要素を欠いた不完全なものであるとするならば、すべて「憐れみ」は退けられなければならないことになるのだろうか。Aug. は「そうではない」と語る。「憐れみ」の要素である「悲しみ」は、時には愛されなければならない。問題は、憐れみが「淨い」mundus ものであるか、それとも「不浄」immundus であるかである。人間は、たとえ墮落の状態にあっても「神の庇護のもとに」sub tutore deo 「淨い憐れみ」misericordia munda をもつことができるのであり、その限りでの「憐れみ」とその要素たる「悲しみ」は愛されなければならないのである。

では「淨い憐れみ」misericordia munda と「不浄な憐れみ」misericordia immunda とは、どのように区別されるのか。

IX.

Neque enim nunc non misereor, sed tunc in theatris congaudebam amantibus, cum sese fruebantur per flagitia, quamuis haec imaginarie gererent in ludo spectaculi, cum autem sese amittebant, quasi misericors contristabar; et utrumque delectabat tamen. なぜなら、わたしは現在、ほかならぬ憐れみの心を持っているからです⁽⁹⁾。しかしかの時、わたしは劇場で、恋人同士が恥ずべき行為によって楽しんでたとき、これらを芝居で架空のこととして行っていたにすぎないのに、彼らと共に楽しんでいました。また彼らがお互いを失う場合には擬似的な憐れみの心から共に悲しんでいました。しかしわたしはいずれをも楽しんでいたのです⁽¹⁰⁾。

Aug. は、「憐れみ」とその要素たる「悲しみ」がすべて退けられるべきではないことを示すために、「現在の自分が憐れみの心をもつ」と語る。そして「淨い憐れみ」と「不淨な憐れみ」とを区別するため、まず「不淨な憐れみ」をもっていたかつての自分の姿を物語る。曰く、

劇場に入り浸っていたときの自分は、登場人物たる恋人たちと共に喜び congaudere, 共に悲しんでいた contristari。しかし実のところ、自分はいずれの場合にも楽しんでた delectare のだ、

と。

かくしてわれわれは、ここで Aug. が退けるべきものとして述べている「不淨な憐れみ」(=擬

似的な憐れみ) が次のようなものであることを知ることができる。

1. 他者が「哀れ」な状態に陥っていることを悲しむ
2. 他者に援助の手を差し伸べようとはしない
3. 「悲しみ」の感情を楽しむ

X.

Nunc uero magis misereor gaudentem in flagitio quam uelut dura perpeccatum detrimento perniciosae uoluptatis et amissione miserae felicitatis. Haec certe uerior misericordia, sed non in ea delectat dolor. Nam etsi approbatur officio caritatis qui dolet miserum, mallet tamen utique non esse quod doleret, qui germanitus misericors est. Si enim est maliuola beniuolentia, quod fieri non potest, potest et ille, qui ueraciter sinceriterque miseretur, cupere esse miseros, ut misereatur. Nonnullus itaque dolor approbandus, nullus amandus est.

しかし現在のわたしは、「恥ずべき行為の中で悦んでいる者」の方を「破滅的な喜びをなくし、哀れな幸福を失って忍従している者」よりも憐れみます。確かにこれの方が一層真実な憐れみですが、この憐れみの中では「悲しみが悦ばせる」ということはありません。なぜなら、哀れな者を憐れむ人は、愛の勤めという点で是認されるとしても、真に憐れみ深い人ならば、悲しんでいることがらなくなることを望むはずだからです。

なぜなら、もし「悪意ある善意」というものがあるとすれば — とはいえ、こんなものはあ

りえないのですが——、真実に誠実に憐れむ人が、みずから憐れむために哀れな者の存在を望む、ということもあるだろうからです。

したがって、ある悲しみは是認されるべきですが、いかなる悲しみも愛されるべきではないのです。

では、もう一方の「淨い憐れみ」はどのようなものなのだろうか。Aug. は、司教となった現在の自分が抱く憐れみについて述べ、それを手がかりに「淨い憐れみ」の性質を分析して行く。

まず Aug. は、かつて劇場に入り浸っていた頃の自分と現在の自分とを比較し、「憐れみの対象が変化して来ている」と述べる。かつての自分は(a)「恥ずべき行為の中で悦んでいる者」よりも(b)「破滅的な喜びをなくし、哀れな幸福を失って忍従している者」の方を憐れんでいた。しかし現在の自分は、反対に(b)よりも(a)の方を憐れんでいる。

そして、みずからが現在もっている憐れみを分析し、こう語る。

1. 現在自分が抱く憐れみの方が、かつて自分が抱いていた憐れみよりも一層真実の憐れみである。
2. この憐れみの中には「悲しみを悦ぶ」という要素はない。
3. この憐れみにおいては、悲しみの対象がなくなることを望む。

ここに、3.として語られることがらは、先に「真の憐れみ」のふたつの要素の内のひとつとして語られた「援助の手を差し伸べる」ということと内容的に繋がることは明らかであろう。すなわち、

真の憐れみをもつ人は、他者が哀れな状況に陥っ

ているとき、悲しみを感ずる。そして、この悲しみの対象をなくするために、他者に「援助の手を差し伸べる」

のである。

そしてさらに、かつての自分がそこに陥っていた「悲しみを愛する」という事態をこう分析する。

1. もし人が「悲しみを愛そうとする」ために、哀れな者の存在を望むとするなら、そのとき人がいだく感情は「悪意ある善意」とでもいうべきものである。なぜなら、その人は「他者が哀れな状況にあることを望む」という〈悪意〉をもっていると同時に、「他者の哀れな状況を悲しむ」という〈善意〉をもっているからである。
2. しかるに、かかる「悪意ある善意」などというものは、あってはならない。
3. したがって、悲しみは——正確に述べるなら——愛されてはならない。ただ是認される *approbare* のみである。

ここで「悲しみは是認される」と述べられるのは、「他者が哀れな状況に陥っている」という事態が現実に存在するからである。真の憐れみを有する人は、他者が哀れな状況に陥っているのを見るとき、悲しみを感ずる。そして、その状況をなくするために彼に援助の手を差し伸べる。つまり「悲しみ」は、人が他者に援助の手を差し伸べるに際しての〈動機づけ〉である限りにおいて是認されるのである。

XI.

Hoc enim tu, domine deus, qui animas amas,

longe alteque purius quam nos et incorruptibilis misereris, quod nullo dolore sauciaris. Et ad haec quis idoneus?

魂を愛したもう主なる神よ、あなたはわたしたちよりもはるかに深く純粋に、また不滅の仕方で憐れんでくださいます。それは、あなたがいかなる悲しみによっても傷つけられることがないからです。ですが一体誰が、これにふさわしいでしょうか。

では、このような人間の有する「淨い憐れみ」は完全なものと言えるであろうか。Aug. は、この問に対して「否」と答える。そしてその理由をこう語る。

人間は、淨い憐れみを有するとき、憐れみの要素たる悲しみによって傷つけられてしまう。

そしてかかる不完全な人間の憐れみと対比する形で、神の憐れみについてこう述べる。

あなたはわたしたちよりもはるかに深く純粋に、また不滅の仕方で憐れんでくださいます。

ここに述べられる「はるかに深く純粋に、また不滅の仕方で」という語が、「悲しみによって傷つけられることなく」ということを含意していることは明らかであろう。

ま と め

以上、Aug. は、悲劇の本質を「悲しみ」*dolor* と捉え、これをそのひとつの要素とする「憐れみ」*misericordia* がいかなるものであるのかを、(1) 劇場に入り浸っていたかつての自分が抱いていた

憐れみと、(2) 司教となった現在の自分が抱いている憐れみを分析することによって明らかにしてきた。

ここから明かになるのは、「憐れみ」には三種の種類があるということである。今、それらの特質をまとめるならば、それらは次のようになるであろう。

【「憐れみ」の三種類】

1. 神の憐れみ *misericordia diuina*
 - (a) 他者が「哀れ」な状態に陥っていることを悲しむ。
 - (b) 他者に援助の手を差し伸べようとする。
 - (c) 「悲しみ」によって傷つけられることがない。広く、深く、純粋、不滅。
2. 人間の憐れみ（淨い憐れみ）*misericordia munda*
 - (a) 他者が「哀れ」な状態に陥っていることを悲しむ。
 - (b) 他者に援助の手を差し伸べようとする。
 - (c) 「悲しみ」によって傷つけられる。
3. 「憐れみ」のようなもの（不淨な憐れみ）*misericordia immunda, quasi misericordia*
 - (a) 他者が「哀れ」な状態に陥っていることを悲しむ。
 - (b) 他者に援助の手を差し伸べようとしない。
 - (c) 「悲しみ」の感情を悦ぶ。

そして、これら三種類の憐れみ相互の関係は、次のような神学的枠組みにおいて捉えられていると考えられる。

1. 人間は、神によって創造されたとき、純粋な憐れみをもつものとして創造された。

2. だが人間は、自らの墮落によって、この純粹な憐れみを「憐れみのようなもの」に変形させてしまった。
3. 救済の途上にある人間は、淨い憐れみを持ち始めている。
4. だがその憐れみも、「悲しみによって傷つけられる」という点でいまだ不完全なものである。
5. それに対し、〈神の憐れみ〉は悲しみによって傷つけられることはなく、広く、深く、純粹、不滅である⁽¹¹⁾。

では、Aug. はいかなる方法によってこのような思想に立ち至ることができたのか。——それはひとえに自らの経験を反省することによってであった。——かつて劇場に入り浸っていた頃の自分は〈憐れみのようなもの〉に溺れていた。現在の自分は〈人間の憐れみ〉をもつことができるが、それもなお「傷つけられる」という点で不完全なものである。——Aug. は、このような形で自己の経験を反省することによって、上記の神学的悲劇論・憐れみ論を作り上げていったのである。

われわれは最後に、上記の結論に対して二つのコメントを加えることによって本稿の結びとしたい。

1. これまでの考察によって明かにされたのは、三つの憐れみの鋭い対比関係であった。このことは、換言すれば、「神の憐れみがいかに人間の憐れみと隔たっているかが、この考察によって——具体的に——明かにされた」ということになるだろう。Aug. は晩年『訂正録』*Retractationes* 2.6.1の中で「『告白』13巻は、自己の善と悪との双方について義にして善なる神を讃える」⁽¹²⁾と

語っているが、*Conf.* 3.1.2-3の記述は、このことの見事な実践ということが出来る。

2. Aug. は、*Conf.* 3.1.3-3における「憐れみ」についての考察を、「かつて劇場に入り浸っていた頃の自分」と「司教になった現在の自分」の〈心理状態〉を鋭く分析することによって行っている。このような分析は——しばしば指摘されるとおり——古代の著作としては極めて異例であり、ある意味で「近代的」とも言えるものである。このような『告白』という著作の特質が、鋭い人間心理の観察者であったパスカルなどに影響を与えて行ったと考えられる。

注

- (1) Pascal, *Pensées* 11 etc.
- (2) *Conf.* 3.1.1.
- (3) 'sanus a ~' は 'free from~' の意味である (Lewis-Short)。したがって、この部分、直訳すれば「これらの感情から自由でなければならないほど」の意味になる。
- (4) 'dolor' の元来の意味は、「身体的痛み」という意味である。*Oxford Latin Dictionary (OLD)* では 'Physical Pain' という訳語が、Menge 羅独辞典でも 'körperlicher Schmerz, schmerzliche Empfindung' という訳語が示されている。そしてこの原義から、いわゆる「悲しみ」という意味が派生した。[OLD] 'Distres (of mind), anguish, grief'; [Menge] 'stiller innerer Schmerz, Begrübnis, kummer, schmerzliche Teilnahme, Mitgefühl usw.' このニュアンスを勘案するなら、dolor は「悲痛さ」とでも訳するのが妥当であろう。Aug. は、以下の議論で 'dolor' とその動詞型 'dolere' をキーワードとして用いて行くが、本稿では、dolor およびその動詞型の dolere に対する適当な訳語が見出せないので、不本意であるが、以下「悲しみ」、「悲しむ」という語を充てることとする。
- (5) ここで暗示的に語られたこの語は、次節で「悲しみを愛する」という形で明確化される。
- (6) 'et' を副詞的にとりこのように訳す。Lewis-Short はこの意味の 'et' について、Introducing

- a strongly contrasted thought, and yet, and in spite of this, and ... possibly, but still, but: ... と説明している。
- (7) 「このことも」 et hoc といわれるのは, *Conf.* 3.1.1 に情事に関連して「友情の静脈流」 uena amicitiae という語が用いられているからである。*Conf.* 3.1.1, Venam igitur amicitiae coinquinabam sordibus concupiscentiae candoremque eius obnubilabam de tartaro libidinis, ... それゆえ私は、友情の静脈流を欲望の泥で汚し、その輝きを情欲の影で曇らせていました。
- (8) 山田晶訳は uena amicitiae を「友情の泉」と訳しているが、これは明らかに誤訳である。この箇所の uena は字義通りには「静脈血の流れ」である。このイメージをもたないと、直後の「瀝青(アスファルト)」 picis のイメージとの関連は分からない。ちなみに宮谷訳は「友情の流れ」と訳している。
- (9) 'neque ... non misereor' という二重否定を、強い肯定と捉える。
- (10) この箇所の原文は、'delectabat' と三人称で書かれており、'delectabar' という一人称の形にはなっていない。「かつての自分を対象化している」ということであろうか。
- (11) Aug. は、その悲劇論を始めるに先立ち、*Conf.* 3.1.1 の祈りの中で神に向かって「わが神、わがあわれみよ」 deus meus, misericordia mea と呼びかけている。この呼びかけは、以下に展開される悲劇論 (=misericordia の分析) の「布石」と考えられる。
- (12) *Retr.* 2.6.1, Confessionum mearum libri tredecim et de malis et de bonis meis Deum laudant iustum et bonum ...